ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　銃口から高速で押し出されるガスの爆発音が響き渡る。

　刹那、ガキン、という音が鳴った。

「――？」

「――！」

　その音が何なのか、雅也と太一には最初、分からなかった。

　なぜならば、目の前に突然、紺色の物体が覆ったからである。

　いや『物体』という表現は正しくない。今、二人に覆いかぶさっているのは、紛れもなく生き物なのだから。

　当然、『物体』ではなく、『何者か』という表現が適切である。

　二人がその事実に気がついたのは、さっきのガキン、という音が、ライフルの銃弾が何かに当たった時に発生した音であることを知った後だった。

「な……なんでここに……？」

　雅也の、ポカンと開いた口から思わず出た言葉が、太一の耳にも届いた。どうやら、今覆いかぶさっている生き物は、雅也の知り合いであるらしい。

「……誰だ？」

　太一は雅也に聞いたのだが、雅也は呆気にとられているせいか、答えない。その代わり、覆いかぶさっている生き物が、じろりと太一を見て、ゆっくりと二人から離れた。

　そこでようやく、太一は今まで自分達に覆いかぶさっていた生き物がなんなのかを理解した。

　その姿を一言で表すならば、巨大なカブトムシと言ったところだろう。一ぽんヅノポケモン、ヘラクロスだ。

「な……な……」

　呆然としながらも、男はライフルの引き金を絞る。多分、無意識に引いたのだろう。飛んでくる弾丸は、的を左に大きく逸れていった。

「なんだ貴様ぁっ？」

　そう叫んで、男はさらに引き金を引く。発射された弾丸は、男に振り向き戦闘態勢をとったヘラクロスまで真っ直ぐ飛んでいき、そして――

「う……う……」

「そ……だろ……？」

　ヘラクロスはその弾丸を、意に介する様子もなく、ツノを振って上空へと弾き飛ばした。

「ふっ……無駄だ。やめておけ」

　不意に男の近くから、少し低めの、渋い声が聞こえる。その場にいた、ヘラクロス以外の全員が、その方向を見た。

「狙いも、引き金を引くタイミングも、全てバレバレだ。何発撃っても、全て俺のヘラクロスが弾き返す」

　砂利を踏み鳴らしながら出てきた人は、この場のほとんどの人やポケモンの、知らない人だった。

「そして雅也」

　彼はそう言って、川の下流を指差し、穏やかな、それでいてどこか叱りつけるような色を含んだ声で雅也に話しかける。

「唖然としている暇があったら、早くピカチュウを助けなさい」

「は……はい！」

「まぁ、もっとも」

　慌てて走り出した雅也を静止するような声で、彼は言った。その瞬間、下流から雅也達の方へ、何かが泳いで向かってくるのが、皆の目に飛び込んでくる。オレンジ色の甲羅のような物に、黄色い何かが乗っかっていた。途端、雅也の足がピタリと止まる。

「ピカチュウの救出なら、優秀な救助隊員が既に終わらせているようだがな」

　彼のその一声で、そいつは川から飛び出て、男のいる岸へと着地した。背中からピカチュウを下ろすと、そのポケモンは男に向き合う。両手を地面につき、尻尾を立たせて、低く唸って男を威嚇する。

ピカチュウを助けてくれたのは、今日、雅也が初めて出会ったポケモン、ゼニガメだった。

「ゼニガメ、慌てるな」

だが、そんなゼニガメを、彼は止める。そして、尚も唖然としている雅也達を見た。

「さて……二人共。ちょっと授業の時間だ。本当は、再来年まで教えるつもりは無かったのだが……いい機会だからな」

「お……おい、あんた誰だっ？」

「た……太一！」

　声を荒らげた太一だが、答えたのは雅也だ。

「あの人は……僕の師匠だよ！」

「し……師匠だぁっ？」

雅也と太一の慌てたような声を聞くと、彼、田島辰巳は少し微笑む。だが、それも一瞬で、すぐに真面目な顔を作った。

「さて、戦う相手が飛び道具を使う場合の対処法だが……」

　そう言いながら、田島辰巳は指をパチンと鳴らす。すると、ヘラクロスが彼の元へと飛んでいった。着地した後、再び戦闘態勢をとる。

「君、一発撃ってもらえるかな？　ついでに『ロックブラスト』ももらえると嬉しい」

　呆然と事の成り行きを眺めていた男に向かって、田島辰巳はあくまでも穏やかな声で話しかける。男達と田島達の距離は約五十メートル。普通なら、銃弾を躱せる距離ではない。

　普通なら、だが。

「な……なら……さっさとくたばれや！　ゴローン、ロックブラスト！」

　男は顔を真っ赤にして指示を出すと同時に、ライフルの引き金を引く。

「いいか、二人共。このくらいの距離が開いている場合、基本的には、こっちも飛び道具で応戦するしかない。とはいえ、飛び道具で反撃できるならそれでもいいが……」

　再び銃弾は空高く跳ね上げられ、さらに続いて飛んできた岩が、大きな音を立てて四散する。

　それでも尚、続けて攻撃しようとしていた男とゴローンだったが、攻撃のモーションに入った頃にはもう、ヘラクロスが男に隣接していた。姿勢を屈めてツノを下にさげ、足腰にグッと力を入れている。

「できない場合は、思い切って接近してしまえ。相手の体に隣接してしまえば、ライフルの弾は当たらない」

　振り上げられたツノが、ライフルを男の手から弾き飛ばすのを見ながら、田島辰巳はそう言った。さらにヘラクロスのツノが、目にも止まるかか止まらないかのギリギリのスピードで、男の両肩、右脇腹、左足の順番に打ち込まれる。止めと言わんばかりに、腹にツノが減り込んだ。男は何が起こったのか理解する暇もなく、膝から崩れ落ちる。

　そしてヘラクロスは、脇で固まっているゴローンの足元に、背後からツノをねじ込む。

「ヘラクロス、メガホーン」

　なんでもなさそうに呟いた田島辰巳の一言が終わった時には、ゴローンは振り上げられ、頭から川に落ちて気絶していた。